平成22年度文学研究科修士論文要旨

「ヴァイシェーシカ学派のアートマン論」

文学研究科宗教学仏教学専攻　仏教学仏教史学研究（Ⅰ）専修　紅　林　直　也

従来「自己」はアートマンとして，ウパニシャッド経典群以来よりインド哲学の中心的課題であった。また，アートマンと共に重要な課題としてブラフマン（梵）の論理が提起されることとなる。インド哲学においてのブラフマンは，時に「世界構造」であり，時に「超越者」として，その存在性は論議される。ここに，名実なる答えはない。ブラフマンという絶対的な対象について，求めるためには，常に「自己」の主観によって求められるものであり，「自己」への探求によって形成される。インド六派哲学期においても，自己と絶対的存在の二極観について同様に論議されている。本稿では，ヴァイシェーシカ学派を中心に自己の実存性について論証を行う。

ヴァイシェーシカ（Vaiśeṣika）学派は，紀元50から150年頃に編纂された『ヴァイシェーシカ・スートラ』（*Vaiśeṣika-sūtra*）を根本経典とする学派であり，開祖はカナーダ（Kaṇāda B. C. 150–50）である。

Padārthadharmasaṃgraha は，学派の論理を大きく発展させたが，その思想は，根本経典とは区分される。学派初期では，無神論的立場を取るのに対して後期では神的存在を取れ入れた合理主義を考察している。これら二つの相違は，神的対象に頼らない立場の自己と神的な自己という存在を明らかにすることである。

学派では，「実体」という万物の構成を基体が存し，性質，運動，普遍，特殊がそれぞれ付加している形状になる。また，学派では六種の句義にそれぞれに，根本の事例が存在すると定めている。詳細は以下の通りである。

①体　：地　水　火　風　虚空　時間　方角　意　アートマン（我）
②性質：色　香　味　可触性　数量　別異性　結合　分離　かなたこなた　知覚作用　快感　不快感　欲求　嫌悪　意思的努力
③運動：上昇　下降　収縮　伸長　進行
④普遍
⑤特殊
⑥内属

人間の構造は，主に生命活動や行動において作用する器官である「作用器官」と，知覚行動作用に関わる「感覚器官」であり，その構成要素は四元素によるものである。単なる集合体であり，無機的存在であるため，自己意識の性質は持ち合わせてはいない。

① 意（manas）

意は，精神主体以外に情報の錯綜を抑える器官であり，認識対象の断定を行う器官である。精神作用と感覚器官との間に結合性をもって，それら認識作用の活動を判断する起点となる。人間には認識作用の軌道停止の活用が生じ，資料因を欠いているか，単一の実体であって実体に依存して存在するものではないため，肉体の内に常住している実体である。また，感覚器官同様に作用を意図的に制御できるため，意にもまた，恣意性は存在しない。

② アートマン（Ātman）

アートマンが，現象世界において恣意的存在であることの証明論理は以下の通りとなる。

① 肉体，感覚器官，意には精神性はない。
② 道具の如く，使用と不使用の状態があることから，使用者が確認される。
③ 呼吸，瞬き等により，使用者の常住性が証明される。
④ 身体における発育と自然治癒力があるため

認識は，精神主体が恒常的であることにより，経験された以前の認識の確実性が生じる。存在性が「瞬間滅」である場合，恣意者に記憶が生じる。しかし，結果の認識は未来のものであり，その結果を認識する時，原因は過去のものであるから，過去と未来の間にある一点において，作用者が生じない事象がそこにある。意識は，睡眠時も継続していることから，この論理は成立しない。「根本有」は，実存であると証明される。

経典により，あることの証因に区別がないから，また特別な証因が存在しないから，有性は一つであるが，それとは，全く同様に，楽，苦，知識が生ずることに区別がないから，また，特別な証因が存在しないから，アートマンは，各肉体に唯一存在するのである。対して，現象世界に遍満するアートマンの「数」は，ある人は楽と結びつき，別の人にはそれがないから，この各個の状態によりアートマンは多数である。よって，ヴァイシェーシカ学派におけるアートマン論とは，「多元論」であると証明される。

近世遊行上人の研究

文学研究科宗教学仏教学専攻　宗教学宗教史学研究（Ⅰ）専修　酒　井　秀　暢

本論文は，近世における時宗遊行派の指導者・遊行上人の廻国の実態を，遊行上人側の史料と廻国先の在地の史料を使って解明するものである。ここで主として利用する史料である『遊行日鑑』について一言しておきたい。『遊行日鑑』は，歴代の遊行上人が全国を廻国した時の旅日記であるが，遊行上人が自分で書いたものではなく，側近の書記役が記したものである。その内容は，相模国藤沢の清浄光寺を出発する様子から江戸幕府との対応，さらに全国を約十年で廻国するが，その時の各地の領主との折衝，廻国先の接待，領主の対応，家臣や町人，農民と上人の対応，宿舎手配の様子などが，細かく詳細に記されている。ただしこの史料は遊行上人側の発想で記されているため，対応する側の意向が掴みきれていない点がある。それゆえ上人の廻国を迎える側の史料を探し，上人側の史料と対照することが必要となってくる。先行する研究をもとにして，遊行上人の廻国の様子を，幕府，各地の領主・末寺などの観点から見直していきたい。さらに，遊行廻国の実例として，紀州藩の例を挙げ，『遊行日鑑』と領地側の記録『田辺町大帳』（紀州藩領内の田辺（現和歌山県田辺市）の田辺町会所の記録）とを併用しながら検討する。また尾張藩領内の末寺の萱津道場光明寺の例も挙げ，光明寺の史料『光明寺文書』，そして，尾張藩士の高力種信の『萱津道場参詣記』をもとにして遊行上人の地域的な活動の様子を考察する。そしてこれらを踏まえた上で，遊行上人がなぜこれほど熱狂的な支持を受けたのかの歴史的な背景を明らかにしていきたい。

第一章「近世遊行上人の廻国」の第一節「江戸幕府の保護と統制」では，遊行上人と清浄光寺が江戸幕府から受けた保護と統制を扱う。「遊行廻国と遊行上人」では，江戸時代遊行上人は，徳川幕府から伝馬五十疋の朱印状が与えられ，これによって全国各地で伝馬五十疋を徴発しながら旅を続けていけるようになったことを説明し，「清浄光寺の本末関係」では，清浄光寺の本末制度と末寺との関係を検討して，「時宗教団における僧階と役職」では，時宗教団の僧階制度の確立と僧階制度の内容について論じる。第二節「遊行上人の廻国」では，『遊行日鑑』の記事を中心に，遊行第四九代一法上人，第五十代快存上人，第五一代賦存上人の廻国を例にして検討し，江戸時代の遊行廻国の実態を明らかにする。「江戸時代における遊行廻国」では，遊行廻国の経路と遊行廻国を概説し，「遊行上人を迎える側の対応」では，一法上人の廻国を例に，各領主から受けた保護を，白米の寄進高を領主ごとに表した表によって説明する。第三節「廻国先での宗教活動」では，遊行上人が全国各地を廻国行脚した際，どのような宗教活動をして，どのような階層に浸透していったのかを，快存上人の例を挙げ，歴代上人忌の法要，宝物の開帳，賦算・化益，過去帳入り，他宗寺院や神社参詣などを検討して明らかにする。

第二章「遊行上人の熊野参詣と紀州藩の対応」では，遊行廻国の実例として紀州藩の例を挙げ，紀州藩領内における遊行上人の熊野参詣の様子と，それを迎える領地側の紀州藩の対応について，『遊行日鑑』と，熊野三山へ向かうため立寄る紀州藩領内の田辺の会所記録『田辺町大帳』とを対比させて明らかにする。第一節「はじめに」で，遊行上人と熊野との関係を述べ，「熊野詣と熊野古道」では，熊野三山と熊野詣，そして熊野古道について解説する。さらに田辺町と『田辺町大帳』を説明し，紀州藩を訪れた遊行上人六人の熊野参詣の日程について述べる。第二節「江戸時代初期の遊行上人の熊野参詣」では，第四二代尊任上人と第四九代一法上人の来訪について解説する。第三節「遊行上人の熊野参詣と紀州藩の準備体制」では，第五二代一海上人が熊野参詣のために来訪した折の，遊行上人側の役僧と藩側の寺社奉行との交渉過程を取上げる。第四節「遊行上人の宗教活動」では，紀州藩を来訪した遊行上人がどのような宗教活動をしてきたかを，第五三代尊如上人，第五四代尊裕上人，第五六代傾心上人の事例を対象に，化益，十念の授与，お守り・お札の配布，熊野参詣などを検討する。

第三章「遊行上人の巡錫と『萱津道場参詣記』」では，尾張藩内の末寺光明寺の例を挙げ，江戸時代における遊行上人の「御札配り（化益）」の実態を，『遊行日鑑』と，尾張国光明寺（萱津道場）に残っている「光明寺文書」，さらに「御札配り」の実態を画と文で伝えた『萱津道場参詣記』という複数の史料を使って，遊行上人側，受け入れ側，参詣者側の三方向からその実態を検討する。

智旭『教観綱宗』の教学思想の研究

文学研究科宗教学仏教学専攻　仏教学仏教史学研究(Ⅱ)専修 ダオ・トリン・チン・ニャン

中国の明末において四大師の一人である藕益大師智旭（1599–1655）は，中国仏教史上最後の総合的な大思想家といわれている。彼の一生の業績は，仏教の諸教学の思想に関する膨大な著作を著したことである。智旭は三十二歳の時に，『梵網経』を解釈するために，天台教学を学んだ。智旭が天台教学を究明した目的は，諸教学についての理解や実践修行などのためである。中国天台教学史上，彼の思想と著作は確実な地位を確立している。

智旭の天台思想は，『教観綱宗』が最も重要な文献である。『教観綱宗』に関する先行研究は，池田魯参先生の「『教観綱宗・釋義』の教判論」である。その研究は，五時八教を究明するに当って，智旭の解釈と従義・元粋・蒙潤の『四教儀』の三大註とを比較したものである。本論文は「五時八教」についての智旭の解釈の仕方と思想とを智顗の教判思想の立場とも比較し究明した。

五時については，諦観・従義・元粋・蒙潤等は，別の五時を正意と偏重し，通の五時の所在を附説したにすぎなかった。智旭は通の五時説こそが天台宗の正統学説であることを証明するために，智顗と灌頂の説を引用している。本論文では，五時の意味として五味の約教相生・約機濃淡・不定毒発の三義を取り上げた。五味の約教相生・約機濃淡の義は別の五時に繋がって，五味の不定毒発の義は通の五時に繋がる。通の五時について智旭の解釈は，教通と時通であるといえる。したがって，天台教学では，仏釈尊の一代の説法の真義と大慈悲の心を明らかにするものとして通・別の五時の両面は法華の「一大事因縁」の精神に基づいて均等的な位置にあり，一貫的相互関係がある，という智旭の立場が明らかになった。また，智旭は「南三北七」の「南三」の岌師の五時偈の固定的時間面を批判して，別の五時の次第相生の順序・次第的断惑証真の意味だけを保留している。

化儀四教では，智旭は頓・漸の二教に教相と教部の二面を挙げている。教相は，教法の内容である。教部は一類の特定な経典をいう。智顗は教相に教部の義をも含めているが，「南三北七」の頓・漸の定義は教部の義に止めたことを区別するために，正式的に頓・漸の二教の部の名を取り上げなかった。智旭は頓・漸の二教の教相と教部を分けて説明している。頓・漸の二教の教相の義について智顗と智旭の解釈は通の五時に関係していることを明らかにした。不定教には，智旭は不定教と不定益を分けて，特に不定益が三種教相の不定教の意味をはっきりするものである。秘密教には，秘密教と秘密呪を取り上げて，秘密教の方便として秘密義の伝えられない面が分析されて，この意は通の五時に繋がっている。

次に，智旭は化法四教それぞれに六即・十乗観法を各説している。智旭は最初的に，通・別の五時から化儀四教までの解釈では，通と不定との意義を通じて，仏釋尊一代の教化教導の円満を顕わし，化法四教にも，その円教の立場に基づいて，円教でなく，蔵・通・別の前三教にも六即義・十乗観法をも解釈している。その中に，化法四教の修証の階位の間には互いに順次に転入・会入か急に飛躍して接入するなどの形式とその内容を説いたことは，智旭の特色である。

最後に『教観綱宗』の独特な点は，その本文の後に，附として「転・接・同・会・借」の五説である。池田魯参先生のいわれる五説は，被接義を解明するものでなく，智旭の解釈では，五説は五時八教に全体的に関係している。被接義は通の五時のみに繋がって，五説の接入・借入に関係する。それに，転入・同入・会入は別の五時に通じる。別の五時の縦来の根性は，転入・同入・会入のことで五時を次第に経ることが必要である。通の五時の横来の修行者は，次第に五時を経なくても，五味の不定毒発の義に基づいて，直接に円教に接入・借入して中道の理を悟って無生法忍を得ることができる。その意味は通の五時と不定益の意味に通じている。

以上，『教観綱宗』の教学を考察したように，智旭は一貫して天台智顗の基本的教学の精神を根拠としている。頓・漸の二教それぞれに教相と教部を並挙し，不定教の不定益の面を，秘密教の秘密義の伝えられない義を，化法四教の前三教の六即・十乗観法で説明し，特に附として転・接・同・会・借の五説を解説している。それらの点は『教観綱宗』における天台教観について，智旭の解釈法の独創であると考えられる。

『教観綱宗』は一万文字くらいの短い文章であるが，天台教学上，重要な教観の解釈書である。

大乗仏教における二諦思想の研究

文学研究科宗教学仏教学専攻　仏教学仏教史学研究(Ⅱ)専修　トラン・クォック・フオン

本論文は，二章から成り，大乗仏教を中軸として，二諦思想を究明したものである。第一章では，大乗仏教の開祖である龍樹における二諦説を鮮明にした。第二章では，その二諦説がインドから中国に伝来し，発展していった経路を明らかにした。さらに，中国で成立した諸宗派は，二諦論を発展させ，独自の学説を樹立したことを明確にした。

第一章では，龍樹における二諦説に着目し，彼の代表的な著書である，『中論』『大智度論』を取り上げて，その学説の特徴を究明した。『中論』観四諦品に説かれる二諦説は龍樹の提起したものであり，「仮名」を世俗諦とし，「空」を勝義諦と主張している。諸仏はその二諦説によって法を説くことを理教の二諦といい，衆生はその二諦説によって悟りの世界に至ることを目的として，修行実践することを約教の二諦という。理教の二諦は真理の形式に関する学説であり，約教の二諦は教法の形式に関する学説であるので，龍樹の提起した二諦説は，理教の二諦と同時に，約教の二諦をも表していることを明確にした。さらに，二諦，理教の面にも，約教の面にも，法（理法及び教法）についての実相を観るので，龍樹の説く二諦は，諸法実相に他ならないと考えられる。『大智度論』では，その二諦すなわち諸法実相を改めて述べているが，積極的・肯定的側面から展開したことを明確にした。両論の二諦説を合わせて龍樹の円熟した思想であるといわれ，その二諦説は仏教の根幹をなす学説であると考えられる。

第二章では，二諦説が中国に伝わり，中国仏教において大きな発展を遂げるまでを三時期に分け，各時期の代表的人物および学説の特徴を取り上げて考察し究明した。

第一期は，魏晋時代の受容期であり，道安，鳩摩羅什，僧肇の三人を取り上げ，各自の学説を中心として論述した。道安は，「可道」を俗諦とし，「常道」を真諦としている。鳩摩羅什については，単独の著書が存在しないので，彼の思想は不明である。僧肇は，「有」「無」を俗諦とし,「非有非無なる不真空」を第一真諦と主張している。さらに，この時代において「格義仏教」という中国固有思想の「無」をもって，「空」と解釈した思潮があったことは事実である。道安の学説は独自の二諦説と思われ，龍樹の二諦説を受けたものではなかったと考えられる。二諦説が受容されたのは道安時代であるが，大乗仏教の空思想を的確に理解し解釈できたのは鳩摩羅什の時代からである。彼の門下である僧肇の学説は龍樹の二諦説を受け入れ，のちに三論教学の学説に多大な影響を与えたと考えられる。

第二期は，南北朝時代の変遷期で，盛んな議論が行われたのは南朝の梁代であり，二十三家の説および成実論師の説を中軸として論述した。二十三家の説は，昭明太子の見解を中心として，「即有即無」を俗諦とし，「離有離無」を真諦としている。また，『涅槃経』に説かれるように，「世人の所知」を俗諦とし，「出世人の所知」を第一義諦と主張している。成実論師の説は，「三仮」を俗諦とし，「四忘」(四絶とも）を真諦としている。両説は，当時主流であった『涅槃経』の思想「世諦即第一義諦」の影響を受けたことが明らかである。特に，成実学派の成立させた二諦相即説には注目する必要があると考えられる。二諦相即説はのちに隋代の学者は痛烈に批判したが，変遷期の学説という役割を果たしたことは認められるであろう。

第三期は，隋代の発展期であり，吉蔵の二諦説と智顗の二諦説が挙げられ，それらの特徴を概観し究明した。吉蔵は，有を俗諦とし，空を真諦とする基本的な型に基づき，徹底的に否定することによって「四重二諦説」を成立させた。智顗は，釈尊が説いたすべての教えを分類整理し，蔵教・通教・別教・円教という化法四教によって，「七種二諦説」を成立させた。さらに，吉蔵の最高の二諦説（第四重）は,「有・空・非有非空・非二非不二」を俗諦とし，「不三，言亡慮絶」を真諦としているので，絶対的真理・真実在は不三であり，言亡慮絶に帰着することを明確にした。智顗の場合は，円教二諦であり，不思議の二諦ともいい，真諦と俗諦とが相互に融合し一体となり，不二であり，その体こそが中道であることを明確にした。そこから智顗は，真諦・俗諦・中道いわゆる「空・仮・中」の三つの真理が合致し円融するという三諦円融説，すなわち「即空即仮即中」を講説したのであろうと考えられる。

中世村落の内部機構について
――近江国菅浦を素材に――

文学研究科歴史学専攻　日本史研究(Ⅱ)専修　竹　内　光　久

畿内近国の村落は中世には惣という自治組織を形成したことで知られている。修士論文（以下，修論）で課題としたのはそれら中世村落の内部構造である。もう少し詳しくいうなら，惣の組織はどのようなかたちを持ち，どのような人々で構成されていたのか，という問題に迫ろうとした。研究対象は，残された史料も豊富で研究史も非常に厚い近江国菅浦を選んだ。

その成立をめぐっては諸説あるが，菅浦は中世後期には惣という自治組織を形成した。この惣にはおとなという指導者層が存在し，対外的・対内的に菅浦を代表する存在だった。

修論では，おとなに該当する語の時期的な変遷を見，ある程度の仮説をたてた。一つは文字上は乙名，老，宿老，老中，長男などと様々だがどれもおとなと読んだと考えられること，もう一つは「乙名」という表現が次第に見られなくなることで，「老」の字を含む表記はどの時代にも幅広く見られることから，年齢階梯制がその背景にあったであろうことである。

次に，おとなと共に菅浦惣の指導者層として史料に現れる中老について検討を加えた。史料上からはこの中老がどのような階層かということは明らかにできないが，これまでの研究では経済発展を背景に成長した者たちだとされる。当時の一般的な社会の動向と照らし合わせてそう言われるのだと思うが，この点に関しては私も肯ける。だが，この中老はおとなの村落支配を規制するおとなに対置される存在だとする考え（藤田達生「地域的一揆体制の展開――菅浦惣庄における自治――」『日本史研究』273号，1985）には肯けない。史料に登場する人名とそこに付される肩書（対象となる人名の所在や役職を指すと考えられるものをこう表現した）を厳密に検討した結果，中老が対内的にも対外的にも果たした役割はそう大きくないことを指摘できた。付言すれば，史料上に現れる「役者」という語も従来言われる（前出藤田氏論など）ように中老を指すのではなく，おとなを指したことも明らかにした。また，「惣庄」や「惣中」という肩書を持ち署名する者は基本的におとなであり，中老が署名する場合は一人一人「中老」と注記されるようにおとなとは明確に区別されたことを指摘した。三人の署名者に「菅浦東中老衆」と肩書を付された史料があることから，勝俣鎮夫氏の言う中老は東西各二人という（「惣村菅浦の成立」『戦国時代論』岩波書店，1996）のは誤りだが，せいぜい5～6人だと考えられ，冠詞のように「廿人」とついたおとなと対照的である。

また，これまで惣におけるおとなの役割は様々な視点から論じられてきたが，修論では永禄末期の借状から，同じ浅井氏に対してでも菅浦内部で借銭状と借米状を作成する場合におとな内で役割分担がされていたことを指摘した。また，対浅井氏と対竹生島という異なる領主に対してもそれぞれ担当する窓口が存在したことを推測した。

また，人名の異同からこのおとなが菅浦惣庄のおとなとそこから分立した東西の惣庄のおとなを兼任していたことも指摘した。

次に，今回検討した史料はごく一部ではあるが，菅浦住人に二種類の層が存在したことを指摘した。分析は署判の花押・略押という現在でいうところの印鑑にあたるものについて行った。これらは当然署判者固有のもので，他人のものと区別できなければ意味をなさない。この署判（修論では花押・略押を含めこう表現した）に対する正しい認識を持っていた者とそうでない者の二種類が菅浦にはいたのである。この二群を，中世前期にまで出自を遡れる菅浦の住人と比較的新しい時期に台頭した層とにあてはめることができるのではないかと推定した。

以上，修論では菅浦の内部機構に焦点を当てて中世村落の一つのケースを検討した。簡単にまとめると，①おとなの役割，②中老の位置，③菅浦惣庄から分立した東西惣庄の指導者，④署判から見た菅浦住人の構成である。①と④は従来されていない指摘，②は研究史に対立するもの，③は従来漠然ととらえられてきた自治組織の内部を明らかにした点で，ごくわずかでも中世村落の実態を解明する端緒になったのではないかと思う。

明智光秀と村井貞勝

――織田氏家臣団内の役割を中心に――

文学研究科歴史学専攻　日本史研究(Ⅱ)専修　立　木　啓太郎

修士論文では明智光秀と村井貞勝について論述した。卒業論文では本能寺の変について検討したが，光秀だけに焦点を当てて視野を広げることは出来なかったため，光秀と関係の深い貞勝について研究を進めようと思ったことが今回の題目に至った経緯である。

第一章では光秀の活動について『兼見卿記』や『言継卿記』『信長公記』の記述を参考に光秀の出自から本能寺の変までを記した。光秀の出自については明らかになっておらず，光秀が史料に登場するのは，永禄十二年（一五六九）正月四日の三好三人衆や松永久秀による本國寺攻めの記述からである。これ以前の光秀については様々な説があるが，どれも確証に至るものではない。

光秀に関しての研究は，彼が起こしたとされる本能寺の変が有名であり，なおかつ謎に包まれているため，本能寺の変の原因が多く研究されている。光秀の生涯について著書を出されている高柳光寿氏や谷口克広氏，秀吉と光秀がライバル関係で三好氏や長宗我部氏の関係と雑賀・根来衆や本願寺が本能寺の変の黒幕であるとした藤田達生氏。藤田氏は近年では京都を追放された後の義昭についての「鞆幕府」についての論文も出されている。また，立花京子氏は信長の三職推任や花押から光秀の文書の年代比定を行っている。このように様々な研究者の説を対比してまとめた。

第二章では貞勝の出自から本能寺の変で討死にするまでを述べた。貞勝はどのような人物であったのか，彼の代名詞でもある「京都所司代」についても触れている。貞勝もまた，出自が明らかではない。しかし，織田信長の尾張在国時代から貞勝が信長に仕えていたことが史料から明らかであり，天文年間から仕えていた。

貞勝の研究は光秀と比較するとそこまで行われてはいない。しかしながら，谷口克広氏が貞勝の代名詞でもある「京都所司代」についての本を出されており，また，久野氏が貞勝発給文書の年代比定を研究されている。また，織田政権の京都支配がどのように行われていたのかを貞勝「京都所司代」の職掌を通して研究されている。これらを参考にしつつ，貞勝がどのような生涯を送って本能寺の変で討死にするのか，その経緯を明らかにしたつもりである。しかし，貞勝に関する史料は光秀と比較して少なく，今回参照した日記などでは貞勝はあまり登場しなかった。もっと他の史料に目を通せば貞勝を取り巻く人間関係を解明できただろうと思っている。

第三章では光秀と貞勝の関係について述べた。幕臣としての光秀と信長の旧臣である貞勝がどのように京都奉行人として政治を執っていたのか，久野氏の「足利義昭政権と織田政権」を参考に，両政権間の関係を踏まえつつ，二人の関係について記述したつもりである。また，独自ではあるが光秀と貞勝文書の年代比定を行った。今回収集した光秀と貞勝文書の表も作成したので何かの参考になれば幸いである。

京都奉行として政治を執っていた二人であるが，光秀が丹波攻めに着手するようになると貞勝が中心となって「京都所司代」として京都での政治を行うようになる。光秀も丹波を平定し，天正十年（一五八二）に武田家を滅亡させて信長の天下統一は目前に迫っていた。そんな中，運命の天正十年六月二日に光秀が本能寺の変を引き起こした。これによって信長は亡くなり，貞勝は二条御所にて織田信忠を守りきれず，息子共々明智軍の手により討死にすることになってしまう。このような情勢を予期することのできた者はいなかっただろう。それにしても，永禄年間から京都での職務で協力し合い，共に信長政権のために邁進してきた二人が戦うことになり，しかも同じ時期に二人とも亡くなる事になるとはなんとも皮肉な話である。

光秀と貞勝の生涯や二人の関係を考察するために文書の解釈や年代比定を行った。しかし，文書の年代比定についてはまだまだ若輩なので完全なものには程遠い。今回，私がやってみた方法以外で一番望ましいのは花押による年代比定であろう。久野氏が論文にて貞勝文書を花押から見て年代比定を行っている。また，立花氏も光秀文書を花押から年代比定を行っている。今回，私は花押については手をつけなかったのでこれについて深く追求することができなかった。

修士論文は私の学部時代からの研究の集大成というと聞こえは良いが，少なくとも私自身はそう思っている。まだまだ勉強不足なのは存じているが，自分の考えを含めながら，この修士論文を読まれる方に，光秀と貞勝についてより知っていただけたら幸いである。

唐代長安城両市における役所の研究

――市署を中心として――

文学研究科歴史学専攻　東洋史研究(Ⅰ)専修　石　原　靖　久

唐代の長安城は，唐の高祖が六一八年に隋の大興城を太極殿と改名してそこで即位したことから始まった。唐代の長安全体の形状は，南北が八六五一・七メートルで東西が九七二一メートルという東西に長い方形をしており，内部の面積は，約八四平方キロメートルであった。内部は，整然とした東西対称で構成され，東西対称の中軸線は，朱雀門街である。長安は，南北一一本，東西一二本の街路が走り，碁盤の目を形づくっていた。長安城の先行研究は，足立喜六『長安史蹟の研究』，平岡武夫『唐代の長安と洛陽』，加藤繁『支那経済考証』，日野開三郎『唐代邸店の研究』，妹尾達彦「唐代長安の盛り場」など多数挙げることができる。長安城の研究は，長年に渡り行われてきた。そして，これらの研究によって長安城の全体が考古学の分野，文献史料の研究などから解明されてきている。これらの論文や著作では，両市などにおける商売が解明されているが，唐王朝の両市における経済統制がどれ程のものであったのかがそれほど解明できていない。その経済統制がはっきりと解明できる部分としては，両市の市署研究である。その経済統制がどのようなものであったのかが，解明されつくされていない。そこでこの論考では，両市における唐王朝の経済統制がどれほどであったのかを論述した。

第一章では，市署について論じている。第一節では『長安志』『唐両京城坊攷』等をとりあげ長安城の市である東西両市について論述した。東市は，役人・貴族などが活用する市場であった。これに比べ西市は，庶民の市場であった。唐全国からの商人・西域からの商人が集まるところであり，その発展は，東市を凌ぐものであった。その発展に寄与したのが「行」と呼ばれた同業者集団である。次に，『長安志』の内容について論じた。『長安志』に記述されている東市・西市は，簡略的なものである。これは，唐代と宋代では経済の違いがある。唐代では，市場が特定の場所に定められ，市場の制限・規制も厳しいものであった。それに比べ宋代では，余剰生産物の増加により市場が拡大し，制限・規制も緩いものであった。この違いによって記述が簡略されたと考えられる。『唐両京城坊攷』の内容は，『長安志』のものよりも市内の様子が詳述されているが，簡略的であることに違いはない。第二節では『大唐六典』をとりあげ市署の職務について論じた。先ず，太府寺をとりあげ論じ，その太府寺は，市署を管理する九寺の一つであることを指摘した。ついで市署の職務に関する部分をとりあげ市署の職務について論じた。『旧唐書』『新唐書』の史料を引き合いに出し論証した。

第二章では，市署の職務について『大唐六典』の市署の部分を両市の管理，市場と売買品の制限の観点から論じた。東西両市の管理は，市場の配置，度量衡の管理，価格の統制に分け論述した。この中で重要だと考えられるのは，度量衡の管理である。度量衡の管理は，太府寺との関連もあり，市署の職務の内でも重要な位置にあったと考えたからである。ついで，市場と売買品の制限は，手工業の売買制限，奴婢牛馬の売買規定，市場の開閉の規定に分け論じた。この中で重要だと考えられるのは，市場の開閉の規定である。これは，第三章で論じる夜市との関連もあり，重要だと考えたからである。

第三章では，唐代皇帝の市に関する「勅」と条文について『唐会要』に掲載されている各皇帝の「勅」をとりあげ論じた。『唐会要』の「勅」は，唐王朝の全土におけるものであり，ここでは，市の規定をとりあげたが長安城の東西両市に限ったものではない。『唐会要』には，第一章，第二章で論じた部分と重複する部分がある。しかし，『唐会要』に記載されているものは，唐全土にわたるものであり，長安城両市に関するものだけではない。重複している部分であっても必要な部分であり，かつ重要なものである可能性があると考えた。唐王朝全土の市の規定を見ていくことにより，長安城の両市の機能も解明できると考え論じた。『唐会要』の市の条には，「勅」と条文が記載されている。この中より，長安城両市に関係すると思われる「勅」を取りあげてある。それは，貞観元年十月の「勅」，垂拱二年十二月の「勅」，景龍元年十一月の「勅」，開元二年閏三月の「勅」，開成五年十二月の「勅」，大中二年九月の「勅」などの各皇帝の「勅」である。

本論文では，市署の経済統制について述べているが具体的な事例の論証が不足しており，具体的な事例をとりあげ経済統制の実態解明には至っていないが，概ねどのような経済統制があったのかが解明できたと思う。具体的な事例の研究は今後の課題としたい。

満鉄職員の見た「満鉄王国」の形成と崩壊

――義父へのインタビューを手がかりに――

文学研究科歴史学専攻　東洋史研究専修　安　藤　松　芳

南満洲鉄道株式会社は日本帝国主義の大陸侵出の先鞭を担った組織であり，軍国主義日本が中国を植民地化，ないし半植民地化するうえで非常に重要な役割を負ったと戦後の研究の中では位置づけられている。確かにこの指摘は戦後における満鉄研究の中心的な考え方であり，異論を挟む余地は無いように思われる。しかし現在中国東北部（旧満洲地区）を旅すると『満洲国』の遺物（主に建物）と満鉄の遺構（鉄道・ホテル・建物）が多く見受けられる。これらの事実はかつて中国東北部(旧満洲)に日本資本による経済支配が行われていたことの証明である。日本資本がなぜ満洲に投資され，多くの日本人が満洲に移り住むようになったのか。その理想とはなんだったのか。その理想が1945年のソ連の侵攻に至るまでに実現したのか否か。それと同時に，義父（安藤三好）が若くして渡満し青春時代を過ごした満鉄勤務時代の回想を元に，満鉄を作った初期の創業者たちの理想と苦悩を描くことを目指した。

まず始めの部分で，戦後の満鉄研究のあらましについて述べる。満鉄研究のおもな研究者として第一にあげたのは安藤彦太郎氏であり，第二にあげたのは原田勝正氏である。両氏の主張の共通点は満鉄の経営主体の一体性を政党と軍部が失わせた，という見方である。やはり加藤聖文氏も同じような考えのもとに『満鉄全史』を書いている。中国側の研究者としてあげなければならないのは蘇崇民氏であり，日本側が入手できない資料等も利用して大部の著作『満鉄史』を書きあげている。これはマルクス主義主観に基づき侵略と反侵略，搾取と被搾取，正義と非正義と，とらえるもので一貫している。だが柔軟性はない。これらの研究者は政治と経済の両面における満鉄の役割を総合的に批評するもので，満鉄の一部分を深く研究しているものではない。一部分を深く研究しているものとしては, 草柳大蔵氏著『実録　満鉄調査部』と小林英夫氏の著作『満鉄調査部の軌跡』などがあげられよう。

「満鉄調査部」については, 今, 再評価がなされており，その先進的思想の存在とは裏腹に壊滅を残念がる意見が多い。だが，終戦から引揚に関する記述は資料の廃棄・隠匿などによりほぼ皆無の状態である。したがって伝記・回想録のたぐいのものが断片的に存在するだけである。塚瀬進著『満洲の日本人』と最後の満鉄総裁山崎元幹の回想録ぐらいしか無い。ただインターネットのブログには引揚者の回想を書き込んだものは数多くみうけられる。

本論文では満鉄研究の不足部分を補う意味から直接満鉄職員であった義父（安藤三好）への聞き取りをページ数を割いて載せ（約13ページ），新しい事実の発見に努めた。そのうえで満鉄の設立時期から解体にいたる沿革を述べ，初代総裁後藤新平の理想がどのようなものであったのかを書き，その経営方針がゆがめられ，最後の敗戦という異常事態のなかで，それが，どう守られようとしたのか，いや守られなかったのかを問う。

したがって第二章の「満鉄の設立」と第四章「敗戦から引揚」の二つの章に力点をおいたつもりだが，文章が総花的すぎて言わんとする論点がぼやけてしまったきらいがある。「清国人をお客として遇せよ」という後藤新平の告諭の意味の重要性をキーポイントとして掲げながら，論理を展開した。この論文はいまも健在な義父に捧げたい。

日中戦争の実態と本質

――満洲事変と盧溝橋事件の共通点と差異――

文学研究科歴史学専攻　東洋史研究(Ⅱ)専修　鈴　木　貴　子

1927年，蔣介石は上海で四・一二クーデターを起こし，その直後，南京国民政府を設立し，中国共産党排斥を宣言した。その後，1928年6月，奉天（現在の瀋陽）付近で関東軍により張作霖爆殺事件が起こった。1928年10月，正式に南京国民政府が成立した。1932年，蔣介石は汪精衛と合体し，「新南京国民政府」を樹立し，更に同年，上海事変が起こり，1935年，中国共産党は中国同胞に抗日救国統一戦線を提唱した。こうした歴史的背景の中で，1937年7月7日夜，盧溝橋事件が起こったのである。

こうした経緯を考えると，日中戦争期において盧溝橋事件は重要な位置にあると見なせる。ところで，日中全面戦争の開始は，盧溝橋事件とする見解が定着しているが，にもかかわらず，その勃発の原因がはっきりしていないことは問題であろう。原因として,「偶発説」や「日本軍計画説」などが挙げられる。日中戦争の時期については，日中戦争論，日中15年戦争論，及び，中国抗日8年戦争論など，いくつかの見解がある。その際，見逃せないのが，中国では，「抗日民族統一戦線」が形成されたことであろう。この契機となったのが，周知の如く西安事変である。ここから蔣介石の「安内攘外」論が「一致抗日へ」という考えに転換する。本修論では，日中戦争時期において，満洲事変・西安事変・盧溝橋事件は連続性のある事柄と考え，それぞれを客観的に捉えることを目指す。

第1章では，蔣介石の略歴に触れ，彼が日本留学での経験を参考に行った新生活運動について述べた。この際，宋美齢と政略結婚したことで得られる利点，及び，自らが日本での留学中に体験したことを生かして新生活運動を展開したことを明らかにした。なお，政略結婚で得られた利点のひとつには，北伐に対する金銭的な援助もあったのではないかと推測できる。

第2章では，満洲事変を客観的に捉え，その名称問題や教科書の問題にまでも論及した。名称問題に関しては，日本の「満洲事変」と中国の「九・一八」事変を単純に同じものと考えられないことや，その使用に至る経緯も違うということが理解できた。その後，当時の新聞史料を使用し，事変が中国軍によって起こされていたと報道されたことを改めて確認できた。

第3章では，西安事変の首謀者である張学良と楊虎城の略歴，事変それ自体を中国側の教科書を使用しながら論述した。首謀者二人の略歴を抑えることで，楊虎城が何故殺害されたかについては，第1として，中国共産党の活動を保護した点，第2として，紅軍と密かに相互不可侵協定を結んでいたことから推測することができた。また，当時の新聞史料を使用し，西安事変がどのように報道されたかも明らかにした。

第4章では，盧溝橋事件の発生や経過を見ながら，事件勃発の原因の一つとして挙げられる「日本軍計画説」を私が支持する理由を述べた。失踪兵「志村菊次郎」の名前が出てきたという事実は重大である。また，王冷斎『盧溝橋事件実録』は，日本軍が中国当局に何の通知もなく，無断で実弾演習を始めたということを明らかにした。さらに，サンケイ新聞社発行の『蔣介石秘録――日中全面戦争――』第12巻の中に書かれている内容からも，盧溝橋事件は，日本軍の計画的事件であることが断定できる。そして，日本と中国の教科書を分析すると，どちらも盧溝橋事件が日中戦争の開始時期と見なしていることが理解できた。

満洲事変と盧溝橋事件の共通点は，満洲事変後，盧溝橋事件後，それぞれ停戦協定が結ばれている点と，2つの事変・事件は，日本軍の謀略であるという点である。満洲事変については，周知の如く，日本では，満洲事変当初，中国軍の仕業と記述されているし，新聞史料から見ても明らかである。盧溝橋事件については，勃発の原因について未だ明らかになっていないが，その流れを考えると，日本軍の謀略と言ってもよいだろう。

つまり，満洲事変・西安事変・盧溝橋事件の相互連続性に関してだが，この3つの事変や事件は，日中戦争期において，重要な位置関係にあった。特に西安事変と盧溝橋事件の日中戦争期における位置関係は重要である。なぜなら西安事変の後,結果的に第二次国共合作を結び,抗日民族統一戦線が形成された点にある。こうして蔣介石の「安内攘外」という考えから「挙国一致」という考えに転換したからこそ，中国は日本に勝利することができたといえるだろう。

クリストファー・クラヴィウス，近代科学への貢献

文学研究科歴史学専攻　西洋史研究（Ⅰ）専修　曽　我　昇　平

クラヴィウス（1538–1612）は，西欧中世末期を代表する数学者・天文学者であり，科学革命を導いたガリレオやデカルトに大きな影響を与えたと言われる。しかし，クラヴィウスに関する業績評価は，従来ほぼ暦法改正と算術に関するものに限定されてきた。

近年，クラヴィウスによるイエズス会の科学教育が評価され，教育者としての業績が追加されるようになった。さらに，ガリレオ研究との関わりから，天文学や力学分野における研究が進み，クラヴィウスの教育学史，数学思想史，科学思想史，哲学史等からの評価が広がっている。それにもかかわらず，クラヴィウスの数学には近代数学の革新性がないとされ，数学者としての評価は低く，研究も進展していないのが現状である。

こうした研究史を踏まえて，本研究では，クラヴィウスの業績を，近代科学・数学の成立への貢献という視点から，以下の 3 つの章に分けて考察し，彼の功績の再評価を試みた。

第 1 章　クラヴィウスの生きた時代と科学革命
第 2 章　イエズス会士クラヴィウス
第 3 章　クラヴィウスの著作から見る近代科学への序章

第 1 章では，クラヴィウスの時代に，科学革命を生み出すことを可能にした前提条件，すなわち①科学と自然哲学に関する翻訳，②中世大学の形成，③神学者―自然哲学者という階層の出現について考察した。

その結果，クラヴィウスの生きた時代は，アリストテレス主義が消え去る前，普遍学を担った神学者が，自然学の諸問題に対する実験や観察法，数学的な処理について，アリストテレス主義との整合をめざし，学問体系の改変も含めて組織的に活動した時代であったことが確認できた。

第 2 章では，イエズス会が，①なぜ会の本来の目的とは異なる教育に積極的に関与したのか，②なぜ会の思想的な中核であるアリストテレス主義と原理的に矛盾する，数学の教育体系の構築を試みたのかを解明し，クラヴィウスの果たした役割について考察した。

イエズス会は，トリエント公会議以降，本来の目的ではない教育に積極的に関与した。それは，カトリックの教育制度の再構築の必要性から生じたものであった。そして，イエズス会の学校が，近代公教育の原点とも言える教育制度を構築した理由は，「一般教養の習得と教育の無償化」という教育理念と，所有と経営を分離した画期的な運営方式にあったということができる。この形態では経営者（イエズス会）は「結果責任を持つ」ことと，所有者（君主・諸侯）に「説明責任を果たす」ことが必要であった。そのため，合理的な教育課程の編成がなしえたのである。

この合理的な教育課程は，所有者（君主・諸侯）の要請から，経営者（イエズス会）の必要性とは別に，数学系教科の学習が求められた。クラヴィウスの貢献は，イエズス会の教育課程における数学系教科の充実にあった。クラヴィウスが目指した数学の重視は，経営者（イエズス会）の有力神学者からの反論も大きかった。そのため，クラヴィウスの案は，アリストテレス主義との整合を図り，実用面を強調してようやく採用された。

クラヴィウスは数学と科学に対する態度を育てるために，実用算術と実用幾何との問題を共有し，数を扱う教科と量を扱う教科を合わせて提示した。このクラヴィウスの教科書で学んだデカルトは，数と量を統一的にとらえる方法を生み出し，近代数学の祖となった。

また，理論的には，数理的な論理の扱いをプラトンの『ピレボス』を基に説明し，『原論』の証明ではアリストテレス主義の三段論法を一部採用した。この手法により，アリストテレス対プラトン，宗教対科学という対立軸が存在しない教育を押し進めた。

3 章では，クラヴィウス著『実用算術概論』を史料として，近代数学への連続性，思想・哲学的な裏付け，教育的な構成・解説の仕方に至る分析をした。

クラヴィウスの著作には，近代数学へ導く要素が多く包含されている。彼の著作を学ぶことによって，科学革命が準備されたのである。これが，本論の史料分析を通して導き出すことができた結論である。

中世のサンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼に関する一考察
――扉口彫刻にみるロマネスクの世界観――

文学研究科歴史学専攻　西洋史研究（Ⅰ）専修　松　田　美　雪

キリスト教三大聖地の一つであるサンティアゴ・デ・コンポステーラ（以下サンティアゴと略）は，12世紀にはイェルサレム，ローマを凌ぐ最大の巡礼地となり，最盛期には年間50万人が訪れていたとされる。本論文は，巡礼路沿いの聖堂建築，特に扉口彫刻の図像に注目するという手法で，当時の巡礼者，あるいは教会が抱いていた世界観について考察した。

第1章では，サンティアゴが巡礼地として脚光を浴びるきっかけと，それがサンティアゴ巡礼に結び付く中世ヨーロッパの聖遺物崇拝の風潮などを含めサンティアゴ巡礼成立の過程をまとめた。聖ヤコブの墓が「発見」されると，アストゥリアス王アルフォンソ2世は直ちに教会を建立して「聖なる土地」とした。こうしてサンティアゴ巡礼は，10世紀半ばにはピレネー以北に拡大しはじめ，11世紀末から13世紀に頂点に達するほど盛り上がった。巡礼が急速に拡大したのは，当時の西ヨーロッパにおいて耕地面積の拡大，農業生産力の拡充，人口の増加に伴った貨幣経済，都市の発展によってヒト・モノ・情報の移動の活性化が生じたこと，そしてクリュニー修道会の活動との関わりがあったことなどが大きく影響した。クリュニー修道会が積極的にサンティアゴ巡礼を支援したのは，レコンキスタと深くかかわっていた。ローマ教皇カリストゥス2世が公会議においてレコンキスタ運動と十字軍を同一視した12世紀以降，イベリア半島において「キリスト教の戦士」としての聖ヤコブ像が定着し，レコンキスタに聖戦的要素が付加されると同時に巡礼に政治的意図が加えられた。このため，巡礼を行うことはレコンキスタ運動への民衆の間接的参加を意味するようになり，サンティアゴ巡礼が盛んになったのである。

第2章では，巡礼者の構成層，巡礼の動機や巡礼のルートの例を挙げて実際の巡礼行についてまとめた。巡礼の道筋は一つではなく，どの道を辿るかは巡礼者に委ねられていた。ここでは特に多くの人々が利用した「トゥールーズの道」，「ル・ピュイの道」，「リモージュの道」，「トゥールの道」の4つの道について12世紀に記された『巡礼案内書』の記述に基づいて整理した。これらの巡礼路沿いには多くのロマネスク様式の聖堂や修道院が建立された。サンティアゴ巡礼路沿いに存在する聖堂では聖ヤコブを象った彫刻を多く目にする事が出来る。巡礼路沿いの各教会堂では，多くの巡礼者が円滑に回れるように「巡礼路様式」と呼ばれる特別な形式が採用されており，サンティアゴ巡礼路沿いに多く見られた。

最後に第3章では，これまでに述べた諸点を踏まえてロマネスク期とゴシック初期の扉口彫刻から見えてくる人々が抱いていた世界観について考察した。ロマネスク聖堂の扉口は「神の国」への入口であると捉えられていたために，太陽の没する西側（死の象徴）には世の終わりを暗示する彫刻・絵画が配されることが多かった。フランスの美術史家E．マールによれば，扉口上部の半円形壁画を彫刻で飾る際，フランスの彫刻家たちは「黙示録のキリスト」「キリストの昇天」「最後の審判」の3つの主題の型を創り出したという。上記の通り，サンティアゴ巡礼路沿いには多くの修道院聖堂が建てられたのであるが，このロマネスク時代と続くゴシック前期の都市大聖堂の多くは『新約聖書』の「ヨハネの黙示録」の象徴的図像で飾られ，扉口彫刻にあっては特にその傾向が顕著に見られた。これらの彫刻は聖堂に入る者たちに終末と再臨，そして最後の審判というキリスト教の教義をすぐさま悟らせるのにもっとも適切で優れた表現形態であった。彫刻の主題に分類はあっても，その根底にあるのは「黙示録」などに描かれている最後の審判に対する恐れであったと考えられる。その後のゴシック期になると，「最後の審判」とともに聖母マリアをモチーフとしたものが多く見られるようになってくる。「黙示録のキリスト」「キリストの昇天」の主題は放棄され，「最後の審判」「聖母の復活」「聖母の戴冠」が13世紀の重要な主題となった。聖母マリアは，神への仲介者，すなわち神にとりなしをしてくれる新しい救済者として現れてくる。ロマネスク期に現れた「最後の審判」のキリストは，人々に地獄の恐ろしさを視覚的に伝え，戒めの意味をもっていたが，ゴシック様式の発展とともにキリスト像は人々に至福をもたらす神の像へと変わっていく。このイメージの変遷こそロマネスク期の人々が抱いていた黙示録的な世界観からの脱却なのである。

土器型式からみた縄文時代早期末葉の様相

文学研究科歴史学専攻　考古学研究専修　枡　田　麻　里

縄文時代早期末葉においては，各地で様々な土器型式が生み出されていた。特に関東地方と東海地方の型式は相互に影響し合っていることが知られている。

地域ごとに土器型式をみていくと，器形はおおむね共通しているのだが，その一方で文様は連続的もしくは断続的に受け継がれていることがわかる。関東系と東海系が交わることで失われたり加わったりした文様があったようである。

その交わりというのはこの時期に土器型式が持ち出され，また他地域から持ち込まれたことである。土器が移動するということは人も同様に移動していることを意味する。縄文時代の人々が自分たちの集落外にある何かを求め，他集落の人々と関係を築いていたと考えることができる。このように各遺跡の事例をみていく作業から関東と東海の関係を土器型式から窺うことが出来た。

また，関東地方に持ち込まれた東海系の土器と東海地方に持ち込まれた関東系の土器の時期が異なることから，一時期においてのみ関東・東海間で土器の動き，つまり人の動きがあったわけではないことがわかる。この関係は連続的ではないが，いくつもの型式を経て再び影響し合っていたことがわかる。

つまり，二つの地域はあくまでも独自に土器型式を発展させていった，ということではなく独自性を失わずに変容しつつも他地域のものを受容していったと結論付けるべきであろう。

関東系と東海系の中間に位置づけた型式は関東系の一型式と混在している状況であるため未だ明確な分布はわかっていない。しかし，今回みてきた遺跡の出土量から考えて南関東から静岡県から岐阜県よりの東海から滋賀県という範囲には確実に広がると考えている。

また広範囲で考えてみると，関東系・東海系・中間の型式のどれもが神奈川県・静岡県・愛知県・岐阜県・滋賀県の5つの県に分布していることがわかった。しかし，その数量は均一ではなく型式毎にかつ遺跡毎に異なっている。そこで重視したいのが滋賀県の事例である。一遺跡扱っているのみであるが，ここから考えられる説がある。

まず，滋賀県においては中間型式が他の遺跡より比率の上で多く出土している。これは岐阜県にもみられることであり，出土数が少ない愛知県とは異なる。つまり，中間型式は関東系と東海系が出会って新たに生み出されたところから岐阜県と経由して滋賀県に持ち込まれていると考えられるのである。この中間型式が作られはじめた地理的な位置は，今回分析した事例が少ないためにまだ断定することはできないが，現段階で考えられるのは，一つには出土量からみて神奈川県や静岡県の辺りではなさそうであるということである。この二つの県で扱った遺跡ではこの型式の出土量は少なく，主体的とはいえない。この点から二県では中間型式は移入されたものであると判断した。

もう一つには関東系が多く持ち込まれている滋賀県で生み出された可能性を否定できないし，こちらの説の方が有力かもしれない。そうであるとすれば，滋賀県で関東系の影響を残しつつ独自の型式として生み出された中間型式が岐阜県に広まり，愛知県や静岡県，さらには神奈川県にまで運ばれていったというルートが想定できる。

関東と東海の関係を理解することはできたが，不十分な点も多く，明らかにできなかったことが複数ある。明らかにするためには対象とする遺跡を大幅に増やして考察することが求められよう。今後さらに検討を重ねたい。

日本の金魚養殖の比較研究

――三大生産地を中心として――

文学研究科日本文化専攻　民俗学専修　石　川　晶　子

金魚はコイ科フナ属の淡水魚である。現在，日本で承認されている金魚は25種であり，未承認のものや中国金魚を合わせると約30～40種が流通している。原産地は中国であり，４世紀頃に揚子江下流域において発見されたといわれている。日本には16～17世紀頃に伝来した。伝来当初，金魚は珍しい高級品であったが，18世紀頃になると庶民の間でも夏の風物詩として普及していった。下級武士が内職の一つとして金魚飼育を行っていたことはよく知られている。

現在の日本における金魚三大生産地といわれるのは，奈良県大和郡山市，愛知県弥富市，熊本県長洲町の三地域である。以前は大和郡山・弥富と共に東京江戸川地区が三大生産地とされていたが，近年の都市化・宅地化により埼玉のほうへ移り縮小化してしまったため，現在では江戸川地区に変わって熊本県長洲町が三大生産地に数えられている。本論文は現在の三大生産地における金魚養殖が発達した歴史的・地域的背景に焦点をあて，比較・考察したものである。また，地域振興の立場としての金魚養殖業にも目を向け行政と養殖者の関係性にも注目した。その目的は，現代社会に多種多様に存在する職業（生業）の中でも，特に異色といえる金魚養殖の現状を追究することであった。

金魚養殖業の特徴として，

・食用魚ではなく非実用的な観賞魚であること。
・水産業の一種であるが，作業内容や養殖空間から農業に近い産業であること。
・生産地が局地的に集中していること。

が挙げられる。弥富や長洲で金魚養殖が本格的に始まったのは幕末から明治にかけてであるが，全国には，江戸や大和郡山ほどの規模ではないが，江戸時代から金魚養殖に精を出していた土地も数多くあった。また，現代でも大和郡山，弥富，長洲，東京以外に金魚養殖に成果を上げている地域もある。しかしながら,「郡山金魚」や「弥富金魚」,「長洲金魚」というようなブランド性は確立されておらず，生産量は偏りをみせ局地的に集中しているのである。

本論文では，三大生産地の金魚養殖の発展の背景となる様々な要因を指摘した。それら要因を分類すると三つの側面に大別できる。第一の側面は，水質や土質，気候など自然環境が金魚養殖に適合したことであり，第二の側面は，その土地の慣習や土地柄，社会・政治・経済的な地理的特徴が金魚養殖に適合したことである。そして第三の側面は人が積極的に関与をしたことである。以上の三つの側面をそれぞれ，（Ⅰ）自然環境の適合，（Ⅱ）社会環境の適合，（Ⅲ）人の積極的関与，と呼ぶこととした。要因の中にはその地方独自のものもあったが，三大生産地に共通していえることは，（Ⅰ）（Ⅱ）（Ⅲ）の三側面が併存したことである。特に，（Ⅲ）人の積極的関与に相当する「養殖業者たちの不断の努力」は重要な要因である。自然環境や社会環境，人々の生活習慣への適合という条件だけでは金魚養殖は現在のように発展しなかったであろう。生産者たちは生産量や品質を上げたり，新しい品種を作出するなど，養殖技術の向上に努めてきた。その努力は戦争や災害などの逆境に絶えることなく現代に繋がっている。しかしながら，今日では技術向上だけではなく，金魚の需要が増えるように生産者側から社会への働きかけも重要となってきた。近年は経済不況や“金魚ばなれ”が進み，生産量を上げるだけでは産業として成り立たないのである。そのため，多くの人に金魚に興味を持ってもらえるように，養殖業者たちは自治体と協力してイベントを開くなどしてアピールしているのである。それが地域振興に繋がっているのである。

近年，大和郡山，弥富，長洲では金魚を特産品としてアピールし，「金魚のまち」ということを特色づけて地域活性化に努めている。平成８（1996）年10月20日，熊本県長洲町において第１回金魚サミットが開催され，大和郡山市，弥富町（当時），長洲町の金魚に縁のある三自治体が参加した。このサミットでは「金魚を通しての地域活性化」というテーマでパネルディスカッションが行われた。この「金魚を通しての地域活性化」として，それぞれの市町では金魚のキャラクターがつくられたり，「金魚」と冠した様々なイベントを開催するなど，各自治体では精力的に金魚を地域活性化につなげている。

この先金魚養殖が続いていくためには，「養殖業者たちの不断の努力」とともに，地域の協力が重要な要素となるものと考えられるのである。

日本語の定型配慮表現の研究

文学研究科日本文化専攻　日本語研究（Ⅱ）表現論専修　王　　翀　　文

発話場面での対人配慮の方法としては，音声実現をはじめとして，形態素や語の選択，句の選択，文型の選択，談話型の選択，ノンバーバル表現の活用等，様々なやり方が考えられるが，本論文では，特定の状況で必ず現れる定型表現について研究を行った。

筆者は，過去，アルバイト先の人にお土産を渡した際，オセワニナリマシタと言って，違和感を与えてしまった経験がある。また，日本での留学生活を通して，ヨロシクオネガイシマスという定型表現が，日本人の生活に欠かせない言葉だとも気づいた。この他，相手に配慮する日本語定型表現は多く存在するが，本論文では，ある点で類似した機能を持つ，この二つの定型表現に絞って考察した。なお，二つの定型表現について，意味と機能を考察した先行研究は過去にない。

オセワニナリマスについては，新聞データベースと会話例から，計119例の用例を集め，用例を「初対面のあいさつであるかどうか」「聞き手コストが確定できるかどうか」「話し手コストが確定できるかどうか」「関係の継続性があるかないか」「一旦切った関係を再開するかどうか」という5つの基準でタイプ分けをした。分析の結果83.19％の用例は「関係の継続性がある」ことが分かった。すなわち，この表現は今後の良好な関係の継続を望むという意味が強いのである。次にタイプとしては3タイプに分けられることがわかった。典型的なのは「よろしくお願いします」に置き換えられるタイプである。聞き手コストのみを基準とすると，65.09％の用例は聞き手コストが存在するという結果が出た。聞き手にかける負担が多ければ多いほど，依頼の意味に近くなる。二つめのタイプの特徴は，聞き手も話し手もコストがあること。聞き手に負担をかけると同時に，話し手自身も何かの負担をする。このような例は，交流や協力を求める状況でよく出てきて，「一緒に頑張ろう」という意味で捉えられる。最後のタイプは，オセワニナル対象が，物や機関等，人間以外のものの例である。相手に負担をかけることや，関係の継続性があるとは言えない。この結果，このオセワニナリマスは単なる挨拶に聞こえる。

次に全体を発話場面から見ると，一対一の関係が多い。このため依頼の意味が生じやすく，言われると世話を焼かないといけないというニュアンスが現れ，聞き手と話し手の関係の繋がりを強める効果が出ることがわかった。

ヨロシクオネガイシマスについては新聞データベースと会話例から，計162例の用例を集めた。用例を大きく「依頼」「単なる挨拶」「依頼と挨拶の中間」の3タイプに分類し，3つの分類に入れにくいものを「その他」とした。3タイプについて見ると，「単なる挨拶」の用例が一番多かった。聞き手にも話し手にもコストが存在しないため，この場合のヨロシクオネガイシマスは，「特定の事案はないが，一応言っておく」というニュアンスが出る。次に多いのは，「依頼」と「依頼と挨拶の中間」であった。この3タイプの例数の差は非常に近く，これはヨロシクオネガイシマスの使用範囲が広いことを意味している。そして，全体としては，良好な人間関係を願う機能を持つとまとめられる。

ヨロシクオネガイシマスの発話状況は，一対多の関係が多い。そのような場合，ヨロシクオネガイシマスは単なる挨拶に聞こえ，依頼性は薄れ，人間関係を円滑にするためだけに言っているという特徴がある。またオセワニナリマスには「一緒に頑張りましょう」という意味が存在する場合があるが，ヨロシクオネガイシマスには，この意味は見られない。

今回の研究では，一つ一つの状況につき，負担があるかどうかというコスト認定で大変苦労した。今後の研究では，判断が明確になるような基準を作るのが重要だと感じた。また今後は，母国語である中国語の定型配慮表現も対照させて，研究したいと思う。この対照研究によって，お互いの文化理解に役立つようなテキスト作りの準備ができたら良い，と思っている。

法界縁起説の源流

――仏教における縁起説の歴史と展開――

文学研究科日本文学専攻　日本語研究（Ⅱ）－１専修　平　岡　慎　紹

どのような立場であれ仏教思想を語る上で無視することが出来ないものがある。それが縁起思想とよばれるものである。縁起とは仏教の根幹をなす思想の一つで，世界の一切は直接的にも間接的にも何らかのかたちでそれぞれ関わり合って生滅変化しているという考え方である。

しかし同時にこの思想は非常に捉え難くもあり筆者も，上記のような辞書的な意味以上に理解を深められずにいた。更に言えば，本研究の主題である法界縁起説，そしてその思想を唱える『華厳経』，『華厳経』に基づいた華厳宗，それら全てについても同様である。もちろん一般的な知識はあったが，いわゆる華厳思想というものや，華厳が目指したものがどのようなものであったのか，その成立した時代背景には何が関係していたのか等の，学術的な言説を学ぶことも，また学ぶ努力をする機会もこれまでになかったのである。そのため本研究では法界縁起を研究する際に，先端的な部分だけを取り上げて研究するのではなく，根底から見直し，順を追い研究することにより，見えてくる問題もあるのではないか，という想いのもと，この論文をまとめるに至った。

そのために第一章では本論文の根底にある，自宗である華厳宗，そして華厳宗の拠りどころとなる『華厳経』の成立に注目した。『華厳経』についての理解は主に先行研究を纏めるという形を取った。

第二章では本論文の主題でもある法界縁起説に対する考察を展開するため，比較対象であり，根本ともいえる二つの縁起説の解釈を進めた。一つ目は縁起説の代表ともいえる十二支縁起説，そして二つ目は法界縁起説の思想にも大きく影響している唯識の説く阿頼耶識縁起説について，それぞれ一般的に説かれていることを纏め，内容をより明瞭にした。

第三章，第四章ではそれらを踏まえた上で，法界縁起説についてまずは概観し，次に法界縁起説の基盤となっている法蔵の『華厳五教章』における「縁起因門六義法」，いわゆる因の六義に対する解釈を進めた。

そしてその後，同じく『華厳五教章』における「六相円融義」，いわゆる六相についての考察を進めた。六相もまた法界縁起説に深く関わる思想であった。最初，筆者は法蔵が『華厳五教章』の中で六相は六義を補うものだと説いているため，六相については簡潔に概観できるという考えのもと六相の研究を進めていた。しかし実際に研究を進めていく上で，六相も，六義と同等に法界縁起の思想に深く関わるものであり，明瞭さの点においてはむしろ六義よりも上であるという考えに至った。

そこで，六義と六相の関係性に関する筆者なりの考察をした後，六相に対し更に研究を深めた。そのためより六相を理解するため，法蔵の弟子とされている澄観の説く六相説を，法蔵の六相説と比較し，考察するに至った。これまで智儼など，法蔵以前の六相説と法蔵の六相説を比較し，研究する論文は存在したが，六相説は法蔵で完成されたとするのが一般的で法蔵以後の人物の視点から考察されることは多くなく，資料も存在していなかったため，そこに着目し，澄観の六相説の考察を進めたものである。

日本語・モンゴル語の比較語彙研究

――『マッチ売りの少女』語彙を対象として――

文学研究科日本文化専攻　日本語研究専修　ユ　ン　ト　ヤ

言語は文化の一部分である。その言語を通してその民族の文化や関連する様々な方面への理解を深めていく。モンゴル語の語順は，日本語とよく似ており，主語と目的語が動詞の前に来るいわゆる SOV の語順である。名詞類は日本語の「てにをは」に当たる格変化を持ち，動詞の活用も基本的に規則変化する。モンゴル語には，縦書きモンゴル文字を使う「伝統的モンゴル語」と，キリル文字を使う「現代モンゴル語」がある。本稿では，伝統的モンゴル語を使って語彙調査を行う。

言語の研究・教育を進めるためには，他の言語との比較研究が有効な手段である。ある言語における一般的な性格と特殊的な性格は，他の言語との比較によって明らかにされるものである。

本稿では，日本語とモンゴル語との比較語彙研究の一環として，『マッチ売りの少女』を資料として用い，日本語・モンゴル語の訳文を同等の基準で語彙調査した上，数量的側面及び品詞別の語彙構成からの比較を通して，それぞれどのような傾向にあるか，また，どのような違いが見られるか，その原因はどこにあるか，などについて明らかにしようとした。

本稿では，異なる単位の単語コードの整数部分とその小数点以下第 1 桁（部門別），第 2 桁（中項目別）と第 4 桁（コード別）を用いて意味分野別構造分析を行う。分析手順としては，まず，単語コードの整数部分の分析では両言語に含まれている品詞の構成関係や品詞の間の有意差を明らかにする。次は，部門別の分析では，どの項目において出現に有意差が生じているかを指摘し，有意差のある項目を取り上げて分析をする。その後，中項目別での分析では，どの項目において出現に有意差が生じているかを指定し，特に有意差の著しい項目だけを取り上げて分析を試みる。

ところで，語彙分析の結果は細かな数字の表になるので，表を見てもどの部分に有意差があるかは容易に分からない。その有意差をわかりやすく，客観的に指摘するためには統計技法である χ 二乗検定法を用いる。

『マッチ売りの少女』における日本語・モンゴル語両言語の語彙の数量的側面の比較と意味構造分析法による比較を試みた結果，数量的側面においても，意味分野側面においても，『マッチ売りの少女』の日本語とモンゴル語の語彙は非常に似ていることが分かった。

寛永期の幕藩政治についての考察

文学研究科歴史学専攻　日本史研究(Ⅲ)専修　石　川　万奈未

本論文では「寛永期の幕藩政治についての考察」と題して，幕府と藩の双方から寛永年間について考察するということに留意しながら，寛永九年以降の幕政の展開を見るとともに，先行研究をもとに家光政権における幕政の評価を再検討し，また寛永期の藩政について事例をあげながら考察を加え，さらに寛永年間の幕藩関係について幕府と藩の交渉を通じてみることから，政治の主導権が大御所秀忠から将軍家光に移ったことによる変化を具体的に把握することを目的とした。

第一章では，寛永9（1632）年に大御所徳川秀忠の死去以降に親政をとった家光の幕政展開とそれに関する先行研究について検討を行った。寛永9年から寛永末年までの幕政において，多くの研究が指摘するように，幕府政治の基礎的な政治機構の整備が進められ，なおかつ鎖国という対外政策の根本も完成する。その中で幕閣の権力関係も大きく変化し，それによって，家康・秀忠政権にみえる出頭人に権限が集中する幕政は制約され，職制が確立を迎え，官僚的な政治機構が成立する。そこに家光政権の特質の一つをあげることができる。

第二章では，寛永期の藩政として，寛永10（1633）年の諸国巡見使と寛永九年の黒田騒動を中心に検討し，幕府からの藩政へのアプローチについてふれた。寛永年間は，藩政も藩政の成立期から藩主であった大名の死去・隠居が相次ぎ転換期を迎えていた。そこで，まず奥羽・松前方面と鹿児島の派遣された諸国巡見使の実例をあげ，その様相と藩側の対応から，諸国巡見使が藩政の細かい部分にまで監察を行い，幕府が藩政の実態把握を図ろうとしていたことを明らかにした。また，黒田騒動では騒動の過程をみるとともに，騒動の結果幕府から福岡藩に出された指示書によって，家老合議制が導入されたことを指摘。こういった藩政への幕府からのアプローチは，転換期にあった藩政にとって重要な意味を持っていたのである。

第三章では幕藩関係として，元和・寛永前期と寛永後期に区分し，幕府と藩の交渉に関する考察をした。秀忠が政治の中枢を掌握していた元和・寛永前期には，土井利勝が出頭人としてその権勢を誇っており，大名側は利勝を頼って自らの政治的意図を叶えようとし，旗本が大名と利勝との間に介在する例もみられた。また，大名と姻戚関係にある幕府に近い大名が大名に対して助言をする例もみられた。しかし，秀忠が死去し，家光の親政が始まるとそれは制約される方向へ向かっていった。それは第一章でみたように幕府政治の展開によるものであって，幕政の展開はこういった面にも影響しているといえる。

以上のように寛永期の幕藩政治を，幕政，藩政，幕藩関係から考察した結果，寛永期の幕藩政治は，政治機構の整備，幕藩政治の安定化がなされたところに特質があったといえるであろう。

The SDS and the Chicago Conspiracy Trial

—A reconsideration of the 1960's Anti-War Movement—

文学研究科英語圏文化専攻　英語圏文化研究（Ⅰ）専修　長　谷　佳　祐

My thesis deals with the 1960's anti-war movement in the U.S, mainly through an anti-war organization's perspective. It can be said that the Democratic National Convention and Chicago Conspiracy Trial were the biggest events in the late 1960's. In 1968, the Democratic National Convention was held in Chicago. Some anti-Vietnam War organizations planned a mass demonstration during the convention. At the time, Chicago was strictly ruled by Mayor Daley, a strong political boss, and he refused to issue a permit to the demonstration. At the convention, approximately 10,000 anti-war activists came together in Chicago. Every night conflicts between Chicago police and activists took place. As a result, eight activists were indicted for conspiracy to incite a riot and in September 1969 the Chicago Conspiracy Trial began. At the beginning of the trial, a black defendant was gagged and chained as ordered by the judge, What happened in the trial? Did these activists really deserve to be arrested? What was the Chicago Conspiracy Trial all about?

Chapter one shows the background of the major movements in the 1960's. The Vietnam War began as a result of the Cold War. The civil rights movement was growing into a primary domestic issue. The U.S. was sandwiched between the Vietnam War and the civil rights movement. Meanwhile, young people who had joined civil rights movement were concerned about the Vietnam War. They saw the U.S.'s intervention into Vietnam as an evil act. The Students for the Democratic Society, or SDS, was one of the most influential anti-war organizations in the 60's. Yippies were peculiar anti-war organization that emerged from the 60's. They mixed new left ideas with hippie's life style. The Black Panther Party was established in 1966, with concepts of black nationalism and armed self-defense.

In chapter three, the focus is on the Democratic National Convention in 1968. The Democratic Party holds the Democratic National Convention every four years to nominate presidential candidates. From 1964 President Lyndon Johnson advanced military intervention and authorized bombing in Vietnam. Hubert Humphrey would be the Democratic nominee, whose policy was to continue the Vietnam War. Anti-war activists thought that the next Democratic Convention was the ultimate opportunity to appeal their slogan, stop the Vietnam War. The SDS, Yippies, and the Black Panther Party came together in Chicago. As the Democratic Convention started, Chicago police advanced on the mass of activists. Conflicts between police and protesters took place.

Chapter three discusses stories of the Conspiracy Trial and a new SDS anti-war group. After the Democratic Convention, eight activists were charged for conspiracy to incite a riot. The defendants had a strategy which was stated by Tom Hayden, one of the defendants, saying"to go beyond narrow terms of the prosecution, to the larger picture of what was going on in America that motivated them to take a stand in Chicago."Meanwhile, outside of the court room, the new SDS anti-war group planned a mass anti-war demonstration and marched in Chicago's streets, smashing and breaking the windows of buildings and cars. This chapter explains why the Weather Underground members got involved in violent activity, what the defendants testified in the trial. and what motivated these activists to take a stand in Chicago.

In the verdict on February 18, 1970, the defendants were sentenced, not for conspiracy, but for crossing state lines with the intent to incite a riot. In the conclusion, I examine the meaning of the Conspiracy Trial and the 1960's anti-war movement itself. The Chicago Conspiracy Trial is still a noteworthy incident in American history and an icon of the 1960's anti-war movement. Hopefully my thesis details the important aspects of what the 1960's anti-war movement has achieved.